

道具から機械へ——アンドレイ・プラトーノフ『チェヴェングール』における新世界

久保 久子

本報告は《машина》という言葉が『チェヴェングール』において担っているさまざまな意味について分析し、このユートピア/アンチユートピア小説において作者プラトーノフが示す新世界への道程を明らかにすることを目的とする。

『チェヴェングール』で使用される《машина》は三つの異なるグループを形成する。第一グループは模倣するためのモデル、第二グループはモーター、ライフル銃、機関車など、華奢で人が守ってやらなければならない人工的装置、第三グループはアレクサンドルと同志たちがチェヴェングールで製作したもので、「労働するマシン」、「光のマシン」、「自己回転するマシン」、「投擲マシン」がある。

登場人物たちの中で政治に関する思考とメカニックに関する思考はいまだ分化しておらず、同一の平面に描かれる。模倣するための《машина》を求めて放浪したザハール・パヴロヴィチは新世界を一点の疑問もなく説明する党を探して歩き回る。一方アレクサンドルは探すのではなく、自分で作り出す。彼の《новый мир》と《машина》は、「作ることができるだけで語ることはできない」ものである。またゴブネルは共産主義の「正確な設計図」を写し取るためにチェヴェングールへやってきたが、人間を調整することはできない、ということを納得すると、《машина》に関しても設計図を放棄してしまう。

いまだ共産主義を知らぬと自覚する彼らであるが、同じように完成図を知らぬまま製作を試みる第三グループの《машина》と重ね合わせることによって、彼らの目指す新世界を明確にすることができる。*машина=новый мир*は、他のものを牽引する部位、他者に強制する権力を欠いている。運動が内在する力ではなく外からの力によって始まるなら、それは《машина》ではなく *инструмент= угнетение*なのである。人も、またどのような物質も、互いに結びつき第三の共通形態をとろうとする。その結果両者の間に電子の交換が生じて電流=共感が流れ、これが運動エネルギーとなる。結合=団結への志向により、《машина》も《новый мир》も休みなく動き続ける。

《машина》は新技術の成果とも新思想の実現ともつかない未分化な形象として存在し、《машина》をめぐる思考はそのまま、新世界を目指す登場人物たちの試行錯誤なのである。

(くぼ ひさこ・稚内北星学園大学)

アンドレイ・ペールイ『銀の鳩』における〈聖域〉

鴻野 わか菜

アンドレイ・ペールイの長編小説『銀の鳩』における〈聖域〉(教会、セクトの空間)の描写を、文学・文化的コンテクスト(ペールイの他作品、ソロヴィヨフ、N.ショードロフ、ロシア正教儀礼等)で検討し、この小説のプロット展開の必然性と、この作品の主題である冒瀆と信仰の問題を明らかにする。

第一に、教会に関する冷笑的な描写(信者たちの姿を、ゴーゴリ風あるいは黙示録の〈獣の王国〉風に描いてみせるなど)はキリスト教の権威の失墜を表しており、たとえばイコンをめぐるエピソード——軽薄なイコン画家たちが、貧者の守護聖人ミコラのイコンを壁から削り取り、裕福な商人の顔に似せた新しいイコンを描いた——は、宗教に対する経済の優位を表している。またプラトンのイコンの喪失は、イデアの終焉、すなわち現実の世界と理想の世界のコレスポンデンスの消失を表していると考えることができる。さらに「異教徒の賢人プラトン」という表現に注意を払うなら、このイコンの喪失はさらに、キリスト教がギリシャ文化や異教との連続性を失い、神秘性、多層性を喪失したことを探しており、ダリヤリスキーがなぜ旧来の宗教を捨てて新興セクトに加入したかというプロットの必然性を考える上で興味深い。ダリヤリスキーが村へ移住したのは「ロシア民衆の魂の奥底にギリシャ的なものがあると信じていた」からであるが、イコンの喪失が指し示すように農村の教会にもギリシャの影はすでになく、主人公はさらなる精神的遍歴を重ねなくてはならないことが物語の冒頭で暗示されているのである。

主人公が〈運命の女性〉と聖堂で邂逅するシーンは、ブロークの同テーマの詩、及びソロヴィヨフのポエマ『三つの邂逅』のパロディとしての意味合いを帯び、「永遠の女性」という価値観を否定している(これと関連して、『銀の鳩』のヒロイン Матрена の名前は、ソロヴィヨフが「神聖なソフィアの徵の喪失」を詠った詩に登場する名であり、ソフィアのパロディの記号であることに注目する必要がある)。また『銀の鳩』では三位一体祭の日に教会の俗悪な光景が描かれるが、作者自伝及び『シンフォニヤ No.2』において三位一体はアンチクリスト降臨のシンボルであることに注目するなら(例: 1898年にペールイは三位一体教会でアンチクリストの到来の予感に打たれる),『銀の鳩』における三位一体祭も「アンチ祭日」、すなわち終末の徵として読むことができる。

(こうの わかな・千葉大学)